

# wt 戦闘日誌

ゆずポン胡椒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここにWarThunderというWW2ゲームがある。

WTの登場人物はもちろん架空の人物。しかし、そんな彼らにも意識があり、記憶があることが発覚した。

これはある一人のWTフォルダの中にポツンとあった、彼らの記録を纏めた物である



雲	F	——	48
マツムラ	戦闘日誌	二冊目	太平洋の雷
雲	G	——	52
マツムラ	戦闘日誌	二冊目	太平洋の雷
雲	H	——	56
マツムラ	戦闘日誌	二冊目	太平洋の雷
雲	最終話	——	60

## 序章 —— 世界観 —— &amp; マツムラ戦闘日誌一冊目

## ヨーロッパの空 A

ここに一つ、War Thunderというゲームがある。

第二次大戦を題材にしたウォーシミュレーションゲームだ。

つい70年前まで 争いをもたらし、人を殺め、人を守り、己が信じる正義を貫き、平和をもたらす

そんな任務についていた鉄の機械 —— 飛行機や戦車、艦船を操るゲームである。

現代、平和の中にある人々にとってこのゲームは命を懸けるようなものではない。

画面を通して世界中の人と、一つのゲームができるという平和を感じる事ができる手段である。

—— しかし、たかがゲームだと思っていたWar Thunderに：詳しく言えばWar Thunderの中にあるパイロット：人間たちに意識、記憶、そして壮絶なドラマがあることが発覚した。

以前よりプレイヤーから 『惑星War Thunder』等と言われていたが、彼らにも歴史と呼べるものがあることが発覚したのである。

この小説は、そんな彼らが付けたであろう日誌を記している。

惑星WarThunder 戦時日誌 1日目

今日、私は混成軍 “ウナラーナ” 第6混成部隊に入隊した。この混成軍とやらは  
いわば傭兵集団である。

この世界の国は単純な歩兵や牽引可能な比較的軽装の兵器のみを軍事力として持つ  
ている。

したがって我々傭兵が正式な軍隊として機能しているのだ。

とはいっても我々は傭兵。一つの国に留まるをしらず、雇い主によって仕事が変わ  
る。

今日爆撃機に乗って、イギリスの街を爆撃する任務に就こうが、明日戦車に乗ってノ  
ルマンデー上陸作戦に参加することだっている。どうやらこの世界の『国』は戦争  
の結果にさほど興味がないらしい。が、やるからにはしっかりと仕事をするのが我々傭

兵の役目だ。

：偉く口を叩いてみたがいだが、私は戦争等知らない。基礎訓練を終えるまでは戦車に乗れと言われても、どこを掴んで登ればいいのか： 飛行機に乗ってみると言われても、タラップが無ければ降りできないほどのひよつ子だった。祖父の書籍で学んだ無駄な知識だけはあるのだが。

そんな私でも傭兵になれたのは理由がある。

この第6混成部隊は新規に開設された小隊であるからだ。

分隊長「英国軍からの依頼だ。今すぐ戦闘機に乗って出撃する！ 今日には新人もいるが、大事な機体を敵地で 落としてくるなよ！」

分隊長のジョーク交じりの声が響き渡る。 初日からパラシュート降下なんて考えたくもない。

分隊長「さて：：貴様！ マツムラ！ 複翼機の訓練は終えたな？」  
書き忘れていた。 私の名前はマツムラである。

マツムラ「はっ！ 終えています！」

分隊長「よし 今日にはグラデーターに乗って出る！」

ビツク「ひよっ子、俺の足を引つ張るなよ？」

分隊長「そう苛めるな、ビツク。お前だつてな…」

ビツクは私より2つ上の先輩である。我らがウナラーナのエース部隊とやらから来たらしいが、なぜ「ひよっ子」第6部隊にいるのかが疑問だが。

分隊長「よし、いくぞ！」

今日から私の傭兵稼業が始まる。



マツムラ戦闘日誌 一冊目 ヨーロッパの空B & マ  
ツムラ戦闘日誌 一冊目C

グラディエーター。 英国の複翼戦闘機である。

我々が今回乗るのは2型で、7・7mm機銃が4門ついているが、運動性能が悪い。

3機のグラディエーターは、英国軍のマークを付けている友軍（…と言つても別基地から来た同業：傭兵なのだが）と合流し、戦地へと向かう。

——戦地上空

分隊長「各機、戦闘に移れるよう気を引き締める。特にマツムラ、お前は初めての実戦だ。気を抜くな」

今回の敵はドイツ軍。私が基礎訓練を受けていた時、基地から十字マークの航空機が飛び立っていた気もするが、我々は傭兵だ。今日の仲間が明日の敵といったことは当たり前であろう。

管制「今回の英軍からのお達しは友軍戦車部隊の防衛だ。なんでも傭兵じゃない、正規軍らしいが…」

ビツク「とにかく、敵を落とせばいいんだろ？」

管制「そういうことだ 頼んだ——」

突如爆音と共に無線が途切れる。

分隊長「散開！」

ビツク「クソツ！」

平穩を保っていたエンジンが悲鳴を上げるように空に響く。

ぐるぐると回る視界の中、火を噴きながら落ちていく管制機が見える。

そしてその向こう—— いや、手前か。

その姿は単翼の戦闘機 BF109であった。

友軍機A「敵機視認!…敵はB…(キーン——)」

分隊長「敵の武装も7・7mmだ!怖気づくな!」

操縦桿を握る手は、震えていた。

その振動は操縦桿を通し、機体全体を——私の魂を揺らした。

私は、揺れる機体を必死に旋回へ持ち込む。

分隊長「敵は単翼機だ。そう追尾はできない！各自旋回しろ！」

そう、追尾はできない。逃れられる。それが単機なら。

友軍機C「二機目：いや、4機だ！4機近くに来てr（キーン——）」

ビツク「友軍機からの脱出確認：嘘だろ」

言葉が漏れるのも無理が無い。必死の旋回の中、空を見ると友軍機が次々と煙を吹きながら落ちていく。

分隊長「完全に上を取られた…！」

16機居た我々も、友軍戦闘機が3機、管制機が一機落ちてしまった。

残るは12機のはずだが、どうも5機ほど見当たらない。落ちてしまったのだろう。

友軍機i「おい、どうするんだ」

友軍機k「このままじゃ狐共に食われるぞ！」

確認できる友軍機は我々合わせて7機。たった4機の敵戦闘機に劣勢。

それもそのはずだろう。

この複翼戦闘機グラディエーターII型は、分類こそ複翼機だが機銃を4門積んでいるおかげで運動性能は大幅に低下している。

敵が奇襲に成功した今、我々ができることはただ凧のように踊り回避することだけなのだが、その回避すらままならないと言えば待つのは死のみである。

まるでそんな我々をあざ笑うかのように、4機のBF109は上空で騒音を響かせている。

分隊長「諦めるな！  
：おいビツク、スモークなんて炊いて何を!？」

友軍機J「あいつ、頭でもイカれたのか？」

ビツク「：」

黙々とビツクはスモークを炊き、そしてぐるぐると旋回を続ける。格好の的だ。

それに対して、まるで雪の中に飛びつく狐のように——格好の獲物を得た、ハンターのようにBF109が飛びつく。

マツムラ「おい！やめろって言ってるだろ！」

分隊長「：いや、そういうことか」

分隊長の失笑が聞こえた。そして、ビツクを追う目の奥には敵機が二機映る。

——いや、あれは敵機ではない。一機は敵機だが、もう一機は——

???

「タリホー!!」

# マツムラ戦闘日誌 一冊目 ヨーロッパの空D

ビツクを指して飛んでいたBF109が火を吹く。

それだけではない。先ほど上に居たはずのBF109が居なくなり、3本の煙が空に描かれていた。

訛り交じりの声「あー、先ほど合流していた小隊五機だ。損失を教えろ」

分隊長「管制機がまずやられた。戦闘機は3機……」

野太い声「フン……おい、お前！煙を炊いた馬鹿、お前だよ」

ビツクの事だ。実戦の中でスモークを炊けば、敵から狙われる。私は無線のボリュームを下げ、飛んでくるであろう喝に備えた

が……

野太い声「よくやってくれるじゃねえか！ おかげで見失ったお前さんたちを

すぐに見つけられたぜ！」

訛り交じりの声「アレクシス、うるさいぞ 無線機じゃなく風防を開けたほう

がお前の声をもっと聞けそうだ」

(野太い声の主)アレクシス「スモークを炊きながら飛ぶなんて命が惜しくない

奴しかやらねえよ どでかい玉の持ち主らしい」

褒めちぎりだった。 マツムラは音量調整器に手を付けるのが馬鹿らしくなって、ボリュームを元に戻す。

アレクシス「オイお前、名前は？」

ビツク「…（マツムラ機を見ながら）マツムラだ」

マツムラ「あっおい！ ち、違いますよ 煙を炊いたのはビツクです！」

アレクシス「ガハハ、違いねえ！ 機体に大きなVの字が書いてるぜ、ビツク

さんよ」

緊張状態の友軍の無線には、一気にほころびが生じる。

分隊長「おい、残りのドイツ機は？」

訛り交じりの声「あらかた落としたはずだが、とにかく友軍の損耗が激しい。弾薬も不安だし、一度基地に戻ろう」

私たちは合流し、前線基地へひとまず帰ることとした。

飛行場につくやいなや、分隊長とアレクシス、そして訛り交じりの声の主が話し合っている。

訛り声の主は、想像と違うハンサムな青年であった。

分隊長「残った友軍機は10機か」

アレクシス「そうだな、別れてる間にこつちも2機やられた。ちよこまかと狐

共が」

訛り声の主「言つてやるな。相手も俺たちと同じ傭兵だろう。それより…あのVの字の奴は？」

分隊長「ああ。おい、ビツク！ お二人がお前に話があるとよ！」

ビツク「了解、…分隊長？」

分隊長「？ トイレだよ」

ビツク「は、はあ…」

分隊長は三人の元から離れていった。

私はビツク達三人の会話に入ることができず、ただ横で聞く。

訛り声の主「俺の名前はブライアンだ。ビツクでいいんだな？」

アレクシス「お前のウイングマンはどこだ？」

三人の視線が一気に私に向けられる。ウイングマンというほどの連携は取っていない



いのだが。

アレクシス「名前は？ よし、当ててやる マツムラだな？」

マツムラ「は、はい！」

先ほどの無線でのビツクが言ったジョークを覚えられていたようだ。

ブライアン「お前、新兵だろ？」

# マツムラ戦闘日誌 一冊目 ヨーロッパの空 E

先ほどまで冗談交じりだった声が突然低いトーンに変わり、背筋が凍る。

ブライアン「俺たちに気づくのが遅すぎる。僚機ならしつかりと周りを見ろ。」

分隊長「あんまり苛めんでくれ。つい先週、タラップがなくても飛行機に乗れるようになったばかりなんだ」

トイレから帰ってきた分隊長がいつの間にか、私の後ろにいた。

アレクシス「とはいえ、ここは戦場だ。一回の出撃で死ぬ奴だっているんだぜ。まずは今日生きてることに感謝するんだな。」

マツムラ「はっ！肝に銘じておきます！」

ブライアン「フツ、返事だけは一人前だな」

アレクシス「マツムラ、俺たちの機体を見てみるか？新兵のお前とは大違いだぜ？」

私は頷き、アレクシスらが乗ってきた戦闘機を見る。

マツムラ「これは…」

アレクシス「まずイギリスから給与されたこいつの腹を握いだ。次に中身だ。」

啞然とするマツムラを尻目に、ブライアンがニタニタと笑っている。

ブライアン「なあと、ただの解体ショーの紹介さ」

アレクシス「エンジンはオーバーホールした。あとこの羽も新造した。」

マツムラ「なぜここまで…?」

アレクシス「そりやお前、自分の命乗つけてるからに決まってるだろ」

即答であった。分隊長の笑い声が聞こえる。

分隊長「一流の兵は機体も一流ってことだ」

ブライアン「もつとも、機体を一流にするにはまずは己が一流にならなきゃいかんがな」

アレクシス「稼ぎが悪いんじや話にならねえや！ガハハ！」

マツムラとビックも思わず笑いだす。先ほどとは打って変わって、団らんな雰囲気になる。

ブライアン「…ブライだ。俺のことはそう呼んでくれ」

アレクシス「お前から愛称を教えるなんて珍しいじゃねえか。俺はそのまま読んでくれ。ミドルネームをファーストネームにしがった親を恨んでやるんだ」

マツムラ「は、はい！ よろしくお願いします アレクシスさん、ブライさん」

会話を終え、マツムラは機体を眺め続ける。

「どうやら機体の中身も違うらしい。マツムラが乗っている傷だらけの操縦席とは違い、取り外せるものは新しい物に入れ替えられている。ここまでくると機体そのものが違うレベルだ。」

しかし、一番気になるのはこの小さな黒板だ。足元のスペースに、定規のようなサイズの黒板が紐で固定されている。

アレクシス「お、目の付け所がいいな。それは自分の落とした敵の分線を入れるのさ。今日はブライアンのも一緒に入れてるぜ。数が多いのはそれが理由だ。とはいっても、別行動中に敵機を落としたのは俺たちだけだからな？ これが、"実力" ってもんよ！」

分隊長「流石だな——

分隊長たちは会話に花を咲かせる。

しかしマツムラはただ一人、言い知れぬ不安感をぬぐい切れなかった。

ビツク「マツムラ、どうした？」

黒板にひいてある線は12本。1本1機なら、マツムラ達が苦戦した4機と合わせれば事前に調べがついている数と同じ、確かに16機。

いや、そんなはずはない。4機分の線は入れ忘れたのだろうか？

マツムラ「アレクシスさん、この数、あなたたちが落とした数でいいんですか？」

アレクシス「ハハ——あ？何がしたい？」

空気が悪くなるのを感じるが、ここで引き下がってはいけない。

マツムラ「最後の4機、あれも全部アレクシスさんとブライアンさんが？」

アレクシスとブライアンが互いに見つめあう。

ブライ「俺は3機落としたぞ？」

アレクシス「大丈夫だ、数に入れてる。全部で12機だが」

マツムラ「今日、私たちは一機も落としていません」

ブライ「アレクシス「なっ…？」」

分隊長「おい、まさか…」

——そう、あと4機敵機が残っている。

完全に気が抜けていた。お互い確認せず、飛行場についてからというもの、ここが戦場で有ることを忘れていたのだ。

アレクシス「馬鹿野郎！何してたんだてめえらは！」

ブライ「落ちて着けアレクシス。ここで言い争っても……」

場の空気はまたも一転し、悪くなっていく。

ビツク「こうしてる場合じゃないだろ！とにかく出るんだ！」

基地にサイレンが鳴り響く。

管制塔<<おい、飛行機から離れてなにをやってたんだ！>>

分隊長「すまない、今全機搭乗した」

管制塔<<5分前、リーダーで敵機を捉えた。おそらくだがすぐ近くにきてて

もおかしくない>>

ブライ「どうでもいいからサイレンを止めてくれ。離陸に集中できない」

管制塔<<……？サイレンなんて鳴らしてないが……>>

マツムラの額に冷え切った汗が流れる。祖父の書籍で読んだ事があるのだ。

サイレンのような音を鳴らす爆撃機の話。

マツムラ「分隊長！上です！」

分隊長「何!？」

ブライ「なっ…」

アレクシス「おっおい！」

その姿は、独軍の急降下爆撃機 J u 87 スツーカだ。

ビツク「こつちに来てるぞ…」

突如、サイレンが止み、代わりに笛のような音が鳴る。

—— 死神の笛。音に気を取られ、上を見上げた時、その正体を見たものは

友軍機 j 「うわああ——こつこつちに k

無線機からの声なのか、外からの声なのか判別はつかないが、その声は突如として爆音にかき消された。

分隊長「損害を報告！」

幸いマツムラら5人の機体には損害はなかった。

が、それ以外の友軍機はとも飛び立てるような状態には無かった。

地獄のような光景とはまさにこのことを言うのだろう。友軍パイロットたちは下からの爆風で風防を突き抜け、上半身を機体にもたれかけるような形で投げ出していた。先ほどの声の主も今は息一つする様子がない。

分隊長「…行くぞ」

真つ赤に燃える友軍機を背に、5機の戦闘機は離陸する。



## マツムラ戦闘日誌 一冊目 ヨーロッパの空 F

先ほどの爆撃機、J u 87 はどうやら爆弾を落とした後すぐに自陣へと戻ったようだ。

そのおかげで損傷なくマツムラ達5機は ”無事に” 離陸することができた。

ビック「グラディエーターで奴には追いつけないぞ」

ブライ「構わないさ。どうせ爆弾引っ提げてまたでてくる それよりも…」

今回の主目標は 味方陸軍戦車部隊の前進を護衛せよ である。

先ほどのJ u 87 が真に狙うべきは味方戦車部隊であろう。

しかし、なぜわざわざ飛行場までやってきたのか。 その答えは一つしかないと思っていた。

分隊長「まずは味方戦車部隊の予定進路に向かう。 その後必要に応じて空戦… もしくは撤退だ」

アレクシス「クソツッ！」

味方戦車部隊の全滅である。

先ほどから何度も無線交信を試みてはいるが、距離があるからなのか全くつながらな

い。

マツムラ達5人は、奇襲に備え警戒を怠らずに味方予想進路に接近していく。

マツムラ「…あ…… 砲撃です！ 敵陣地から砲撃が…」

ブライ「ならまだ味方はいる。間に合ったようだ」

味方戦車部隊<<上空飛行中の友軍機！聞こえるか!?!>>

アレクシス「ああ、ばつちり聞こえるぜ」

味方戦車部隊<<ならよかった！ 先ほど爆撃機2機に味方が大勢やられた！

残るは5両だ！早急な援護を要する！ 敵砲兵隊を撃破してくれば敵の戦車はな

んとかする！>>

無線には敵の砲撃がさく裂する音が混じっていた。しかし、その声は力強く、まだ

戦える意思を持っている声だ。

分隊長「ブライ、アレクシス マツムラと共に地上攻撃してくれるか？

何度の高い技だ、地面にキスしないようにアドバイスしてほしい」

ブライ「了解、上空の警戒は頼んだ」

アレクシス「おいマツムラ！ 地上攻撃もやったことないのか！ カーツ、本当に新兵なんだな！」

地上への機銃掃射は何度の高い技だ。撃破自体は航空機を相手どるより簡単だが、問題はその後である。高空から攻撃をすれば安定して敵を狙えるが、すぐに機首を上げなければそのまま地面にダイブだ。

低空から侵入し攻撃をすると、機首上げはそれほど気にしなくてもよいが、深く追い込みすぎるとこれまた木等の障害物にぶつかり地面へぶつかる。

機体と地面がぶつかることを 地面とキスする。だなんて言うらしいが、一生を地面とのキスで終えるなどとだけ深いキスなのだろうか。できればそんなキスは体験したくないとマツムラは思いつつ、アレクシスとブライのアドバイスを耳を傾ける。

ブライ「いいか、グラディエーターIIは機銃が4門ある。これなら一瞬で蹴りがつけられる。運動性能も低いから、低空でノロノロと侵入するのはあまりお勧めできない。」

アレクシス「まあ、高速低空飛行でパーツとバラまいた方が俺は好きなんだがな。

一撃で決めるには如何せん難度が高いぜ」

マツムラは、ブライ達が言う通り見下ろした状態で射撃することに決めた。

——照準を砲台に捉え近づく。

——敵兵が見える距離まで近づく。

——敵兵がこちらに気づき、空を見上げた瞬間に——

マツムラは引き金を引く。敵兵が跳ね上がったかと思うのもつかの間、砲台横にあつたであろう弾薬が爆破し砲台は吹っ飛んだ。

マツムラ「やった！やりました！」

ブライ「敵を撃破したら操縦桿を引け！機首を上げるんだ」

マツムラは言われた通り、操縦桿を引く。先ほどまで狙いをつけていたため前屈姿勢であつたのだが、そのことを忘れていた。腹のあたりにGがかかり、吐き気がする。

アレクシス「終わったと思うにはまだ気が早いぞ！対空砲が追尾してくる！」

ブライ「垂直な上昇だけは避けるんだ。速度が死ねば対空砲にとつていい的に

なる。かといって、地面と平行に真つすぐ飛ぶのも予測が簡単で撃墜されるだろう。緩やかな旋回を描くように見せてさつさと敵の射程から離脱するんだ」

マツムラは後ろから迫ってくる対空砲の曳光弾を感じながら、次の目標を探す。ブライ、アレクシス、マツムラら3機は順調に敵砲兵隊を薙ぎ払っていく。突如、分隊長から無線が入る。

分隊長「敵戦闘機2機を落とした。スツーカーは1機撃破」

ビツク「残るはさつき飛行場でお漏らししていった一機だけだ」

アレクシス「なんだ、やろうと思えばできるんじゃないか」

分隊長「伊達に生き残ってはいない。弾は殆ど残ってはいないが…ひとまず高度を上げる」

ブライ「俺たちもあらかた片付いた。敵爆撃機の索敵、迎撃に移ろう」

マツムラ達は高度を上げる。最初の会敵から予想するに、敵戦闘機は3000mあたりで飛んできていた。ならば爆撃機もその付近、もしくは地上目標を視認するためそれより下で飛んでくるだろうと予測していた。

## マツムラ戦闘日誌 一冊目 ヨーロッパの空 G

5機のグラディエーターは高度2800mを維持し、敵爆撃機を探す。

味方戦車部隊<<まもなくこちらは片付きそうだ 援護感謝する>>

分隊長「いや、まだ早い。爆撃機が一機残ってる」

味方戦車部隊<<そうか。全車、ターレットにつけ！機銃を使って落とすぞ！>>

>>

ここまでくれば負けることはない。マツムラ達は安堵した。主目標である味方戦車部隊の護衛も、あと一機スツーカーを落とせば完遂できる。

——突如、サイレンが空に鳴り響く。先ほど、飛行場で聞いた音と同じだ。

分隊長「サイレンが鳴っている：スツーカーだ！地上部隊を狙っているぞ！」

ブライ「どこだ！」

アレクシス「どこにもいねえぞ！」

5機のグラディエーターは自分たちのいる2800mから緩やかに降下し、敵機を探す。

しかしどこにも敵影は見当たらない。空に不気味なサイレンが鳴り響くだけだ。

ビツク「マツムラ、この音大きくなってないか…?」

5機の中で上方を飛んでいたマツムラとビツクはサイレン音が大きくなっていることに気づいた。

マツムラははつと気づく。

マツムラ「上…!!」

当たり前と言えば当たり前だ。飛行場と同じ音が聞こえるのだから、上から来るに決まっている。

しかしまさか、爆撃機が単機で戦闘機を落とすに來るとは——

ブライ「待ってろ、今そっちへ向かう」

アレクシス「避ける!」

はつと我に返る。視界に写っているのは飛行場で見たのと同じ光景…いや、それとはまた別だった。

J u 87は、マツムラ目掛けて降下してくる。

マツムラ「ひっ…」

視界にJ u 87がいつぱいに写る。

分隊長「マツムラ——!!」

直後、J u 87 は爆発した。先ほどまでマツムラ目掛けて落ちてきた物は、それまでの形とは違い鉄の塊となって明後日の方向にぐるぐると落下していく。マツムラは何が起こったのか分からなかった。

アレクシス「なんてこった……!」

ブライ「今どきラムアタックなんて流行らない……まったく」

J u 87 と共に、一機の複翼機が落ちていくのが見えた。

破片の中には、分隊長のマークが見える。

ビック「嘘だろ……おい」

マツムラはようやく理解した。

マツムラ目掛けて飛んできたJ u 87 に分隊長が体当たりしたのだ。

無論、そのようなことをしてタダで済むはずがない。パラシュートも確認できない。  
い。

何故、ここまで……



突如、無線が入る。

分隊長「無線はいかれて無いようだな……」

分隊長の声が聞こえる。

マツムラ「なんで……なんでですか！」

分隊長「マツムラ お前はまだ若い これからじゃないか」

分隊長「それに私の部下が……初戦で死んだなんて知られたら…… 私の名に傷がつ

く」

ビツク「早く脱出を！」

分隊長「無理だ。 操縦席に杭を打たれてしまった。」

分隊長の無線には息が漏れるような音が聞こえている。 おそらく、航空機の部品が体を貫いているのだろう。 敵機が爆散するほどの勢いだったから、こうして無線交信できるだけ奇跡だ。

分隊長「ビツク、隊を頼む……切るぞ」

無線が切れた。

マツムラ達にはまだ伝えたかった言葉があつたが、出かけた言葉を飲み込むしかなかった。

緩やかに降下していくグラディエーターが地面に衝突し、そこから一筋の煙を空に描くの見届けると、4人は各々が所属する傭兵軍の飛行場への帰路へ着く。

ブライ、アレクシスと別れをつげ、帰還する。

数時間前まで同じところを浮かんでいた三本の飛行機雲も二本になり、どこか弱そうな線を描いていた。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 A

日本。

厳密には、ここは日本ではないが。

○月○日——ガダルカナル島。

強い日光とじめじめとした湿気で染み出す汗も、森からであれば潮風がぬぐい取ってくれる。

しかし、予想と違う戦場にマツムラは不安をぬぐうことはできなかった。

一か月ほど前、マツムラ個人宛に日本軍からの依頼が届いた。

マツムラを含む多くの傭兵は、ヨーロッパを主な拠点にし活動する為、遠方——太平洋まで出て仕事をするものはあまり多くない。

移動の時間も経費も高くつく。多くの依頼は依頼人である国が負担してくれるが、それでも効率を考えればあまりよろしくない。

依頼者としても近場を拠点にする傭兵に声をかければ負担も少ないだろうに、なぜマツムラに依頼が来たか。　　こういったことがあるとなにか裏があるんじゃないかと警戒する者もいる始末だ。

しかし、それでもマツムラだけでなく、遠方の傭兵に依頼を出す国があるのだ。その理由は――

日本軍兵士「傭兵軍第6隊マツムラ殿に用が。貴官を日系人とみて頼みがある。」

そう。彼らは日系人の傭兵を雇うために、ヨーロッパまで出向き、声をかけてくるのだ。

どうも、太平洋側で活動する傭兵は白人が多いらしく、白人の傭兵を雇うにも抵抗があるようで……

以前祖父の書齋にある文献で見た物としては、日本という国はとにかく異質で、自らと違う物を拒む傾向が特に強いらしい。それでいて、自らに近づいてくる物は拒まずに受け入れ、使いやすいように改造する……とかなんとか。

マツムラの祖母は日本人であったが、そんなことはなかったと思う。道端で倒れている人がいたら助け、近づいて来るものには用心し、それでいて新しい物には鈍感で昔の道具を好む人間であった。

人間という物の本質とやりにマツムラは興味はないが、国民性はあれど個人の感性まではさほど影響しないのではないのだろうかと思う。

兎にも角にも、傭兵にとつての仕事の依頼ともあれば裏がありそうな仕事であつても無下に断ることはできない。

今の第6隊は隊長も不在で2人のみの隊であり、戦闘もここ最近行つていなかったから、本部から合併もしくは消滅を言い渡されるといふ風のうわさも聞いていた。

それを危惧してか、もう一人の隊員ビツクは、マツムラを置いてヨーロッパの戦場へ仕事に出てしまつていた。

今回の日本軍の依頼も例にもれず移動手段や食料などは日本軍が負担してくれるらしいとの事で、私は迷わず依頼を受けた。

彼らに乗つてきた飛行艇に搭乗し、太平洋を——日本を目指した。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 B

日本軍の飛行艇に乗ったマツムラであるが、実は飛行機の客席に乗ったのは初めてであつた。

降下訓練の際に輸送機の格納庫に乗ったことはあるが、前に向いて席が付いている物には乗ったことがない。

操縦手A「マツムラさん、あんたが今座っているのは指揮官席さ。本来は指揮官殿が座るんだが、どうもドイツに用事があるようだね。あんたを迎えにいった憲兵は陸路で指揮官殿連れてドイツに行ったわけよ」

操縦手B「そういうわけ。これでのんびりやれるわ。おいてきたお偉いさんお帰り用の飛行艇は大変やろうがな。マツムラさんも気楽になあ」

マツムラ「は、はあ……」

祖母以外の純日本人とこうして話すのは初めてだが、なんだか腑抜けした。基地で会った日本兵……憲兵とはまったく氣質が違う。どこかのんびりとした、祖母やヨーロッパの人たちと変わらない性格の人達だった。

マツムラが乗っている飛行艇は H8K 二式大艇と呼ばれる機体だ。

航続距離は7000キロに及び、飛行艇の名の通り海等に着水できる。乗り込むときに見たその機体は非常に大きく感じた。ぱつと見ただけでは武装のようなものは見つけることはできなかったが、のつぺりとした水鳥のようなそのフォルムで、数多の敵制空権内を通り日本までたどりつけるのだろうか…

マツムラのそんな心配はよそに、飛行艇はヨーロッパを通り抜け、地中海とインド洋をつなぐアデン湾に着水した。日本海軍艦艇から燃料を補給し、また飛行。しばらくしてミャンマー沖合に着水し、同じく日本海軍の艦艇に接触する。

操縦手A「マツムラさんすまんな。陸に一回上がりたくなる頃だろうが、ここいらの国は色々と危ねえのよ。」

マツムラ「とうと?」

操縦手A「俺たち日本という国が何をしているかは傭兵のあんたならわかるだろ?」

マツムラ「いや、太平洋戦線は初めてで…色々と詳しくないんだ」

操縦手B「そうかあ。ま、簡単に言うるとミャンマーを占領したのはいいんだが。ビルマ解放軍とか言つて…とにかく日本人が街出歩けるような場所じゃないのよ。」

マツムラ「はあ…」

操縦手A「あんたらの基地に行くときも寄つたんだが、陸さんの宿泊所に迫撃砲が撃ち込まれたとか何とか騒いでたな」

どうも、日本軍も大変らしい。マツムラはふと疑問に思い口にする。

マツムラ「解放軍といつても大した規模じゃないんだろ？なぜ殲滅しないんだ？」

操縦手A「どうも軍内部に内通者がいるらしいとうわさだ。物資を流せば阿片が手に入るとか」

マツムラ「阿片!?アヘンってあの薬物のか？」

マツムラもアヘンについてはよく知っている。祖父の書齋で読んだ本によると、医学において昔は鎮静剤として使われていたそうだが、国際連盟が設置されてまもなく麻薬として貿易禁止された薬物だ。

操縦手B「陸さんのような戦いじゃあ薬も必要だわなあ。 のんびりしてたら頭打ち抜かれちゃうしなあ」

操縦手A「そういうわけじゃないとは思うがな… まあ、俺たち日本兵にとつて金の価値がほとんどないここじゃ、薬が金の延べ棒みたいなものなんじゃないのか」



マツムラの傭兵軍の基地ではアヘンのような薬物は禁止されている。だが、傭兵軍内には使用した事のある者、今も使用しているのではと思われるいた人もいた。使用した事のある者と話したことがあるが、どうも体に入れると「楽」になるようだ。なにが？ とマツムラは思ったが、すぐにそのあと招集がかかって聞くことはできなかった。

操縦手A「よし、燃料補給が終わったようだ。一気に日本まで行くぞ。」

楽… 一体何が楽になるのだろうか。

酒で得られる快楽とは違うのだろうか。いや、何も変わらないだろう。酒に溺れる物の末路はマツムラはよく知っている。薬だって同じだ。手を染めたら、もうそれは落ちる所まで落ちた証なのだ…

そんなマツムラの思考を置いていくかのように、飛行艇は海を割って空に向かって飛ぶ。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 C

「つきましたよ、最終地点です」

嘘だろ？ とマツムラは思った。そこは飛行場ではなく、ましてや飛行機の姿などなく、果てしない水平線と日本軍艦艇しかない。太平洋上である。

「あのー、これは……」

「私たちも任務の内容は聞いてないからなあ…… お、内火艇がきましたよ さあ乗って乗って」

言われるがままに、マツムラは内火艇に乗り込む。

きつとこの駆逐艦で日本まで向かうのだろう…… そう思う他ない。

内火艇が駆逐艦に接舷し、駆逐艦へと乗り込む。

「ようこそ、我が艦へ。貴官と共に行動する隊は中におられますぞ。」

「はあ……どうも。」

艦艇の中に入るとなんといいえない臭いと共に、数十人の男たちの姿があった。

彼らは日本陸軍の兵隊のようだが、これから戦地に向かう様相には見えず、疲弊しきつたように見えた。そんな中から、マツムラに話しかけてくる者が一人いた。

「お前さん、純日本人じゃないな？俺はタナカだ。傭兵と見たが、どうだ？」

そう話しかけてきたのは、彼らの服にある階級章で、唯一横線の入った者だ。

「そ、そうだ。私は傭兵で、日本軍の要請を受けてきた。」

「そうか。ここにいる奴は中国で戦ってきた奴らだ。全員戦車兵だよ」

彼の言う通りだろう。この部屋に入ってからこの異臭も、単なる汗や体の臭いではなく、機械油のような臭いなのにも説明がつく。

「中国での実戦経験を買われてな、戦車中隊ごとガダルカナルへ移動が命じられたのさ。」

「となると、この船は今からガダルカナルへ？」

「そういうことだ。よろしく頼む。」

マツムラはうすら笑いを浮かべながら、内心愕然とした。まさか、ここにきて戦車に乗れとは…

乗ったことがないわけではなく、傭兵軍に入る際に初級訓練として搭乗したことがあるが、どうせなら一度実戦を経験した飛行機の方がまだマツムラとしてはやりやすい所があった。

（こんな初心者同然の俺をなぜ日本軍は雇った？実戦経歴はわかっているはずなのに…いくら日本人傭兵が少なく、俺が日系人だからといって…）

マツムラは仕事内容を聞かずに飛び出してきた自分を恨んだ。

傭兵というのは自国の兵でないため、何か損害が出ても支払った金以外に手間がいら  
ない。

ならば初心者だろうが、人手が足りないなら構わない。移動にかかる費用も行きだ  
けなら単純に半分だし、今回に限って報酬は成功しなければ出ない。

完全にやらかした——

マツムラが後悔しているのを察したのか、周りの日本兵もじろじろと睨んでくる。

「おい皆！長い移動で疲れてるだろうが、俺たちはこれから米兵と戦うんだ！中国人と  
違つて敵も戦車を出してくる！今はしっかりと各々休むんだ。」

タナカの声に従つて、周りの日本兵は布団に寝包まつたり、外に出たりしていく。

マツムラも我に返り、戦車の乗り方、操縦、砲手、何を任されても戦えるように——  
生き残れるように、訓練で覚えたことを思い出し始める。

マツムラの戦いは、もう始まっている。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 D

<<<内火艇1番、作業やめ>>

艦内放送が鳴り響く。マツムラ達は上陸準備を始めていた。もしもの時の為に備え、各戦車搭乗員には拳銃が渡される。ここにいる日本陸軍兵の中で一番上官であるタナカが一号車を、二、三をまたいで四号車をマツムラが車長を務めることになった。

<<<輸送艦、接舷用意>>

まず、マツムラ達は駆逐艦から輸送艦に移り、そこにある九七式中戦車 千八 に乗り込むことになっている。ヨーロッパ住みの日系人であるマツムラは 千八 という戦車は見たことも聞いたこともない。が、自分の命を預ける機械であるから、マトモなもので有ることを祈った。

「全員輸送艦に乗り込め！ 乗り込んだら戦車内で小一時間待機、指示有り次第上陸するぞ！」

タナカの声に従い、全員輸送艦に移動する。

駆逐艦の外に出てみると、そこには数隻の輸送艦と駆逐艦が皆同じように接舷してい

る。

内心、マツムラは安心した。まさか4両で交戦させられるのではないだろうかと思っていたからだ。他の輸送艦にも同じように戦車があるようで、計16両での作戦で有ることをタナカから知らされた。

今回の任務はこうである。

輸送艦揚陸後、速やかに展開し、ガダルカナル島にいる日本軍兵が輸送艦に乗り組むまで近辺を防衛すること。

以上。

この内容を聞き、輸送艦内にいる陸軍兵からはどよめきの声が聞こえる。

なぜ撤退する必要があるのか。敵を島から追い出すのではなく、我々が追い出されるかどうなのか。

正直、マツムラも驚いた。16両という大編成であるにも関わらず、攻勢でも防衛陣地を築くでもなく、一時的に輸送艦を防衛せよという任務とは。

しかし、どんな任務だろうと遂行してみせよう。私は傭兵で、任務に疑問を持つ必要はないのだ。とにかく任務を遂行して生きて帰れば今はそれでいい。と、マツムラ

は自身に言い聞かせた。

マツムラは　チハ　という戦車を目前にする。一つ率直な感想があるとすれば、中戦車？である。　備兵軍の基地で見た　中戦車　とは全く違う。　旧式の戦車——厳密にはルノー戦車に似ているな　と思った。　どこが？　と言われると、自信を持って答えられるのは砲の付け根とかかなあ　といった曖昧なものだが。　とにかく、信頼性は高いのではないだろうか　と思った。

旧式に似てるなら、変な動作不良もないだろうと思つたからだ。

「中国で見たのとは違うな」　「なんでも改造型だそうだ　戦車戦に特化してるらしい」  
今は信頼しよう　と、マツムラは九七式中戦車に乗り込んだ。

くく上陸する陸軍兵は既に海岸付近に集まっている　3時間で作戦は終了　その後は速やかに各輸送艦へ戻る事　とのことだ　また、上陸後は敵に悟られないよう無線は交戦あるまで切る事。　皆の武運を祈るくく

「しつかしまあ…撤退とはねえ…」

マツムラの下から声が聞こえる。どうやら無線手がしゃべったようだ。

「車長さん、あんた命拾ひしたんじゃないか？　もしくは、備兵のあんたでも　敵地につっこめ　なんて命令しないよな？」

「まさか、そんな」

マツムラの頬が緩んだ。

「ちよつとレバーが硬いですね… 油持つてきます」

「おいおい、押すな押すな。 すみませんね、マツムラさん」

戦車の事しか目がないとでも言わんばかりの操縦手と、堅物に見えて冗談が通じるような砲手も口を開く。

「どうやら、初めて会つたにしてはそこそこうまくやれてるんじゃないだろうか？」とマツムラは思った。

カランカラン——カランカラン——

鐘の音がなる。揚陸開始の合図である。

1号車から順に、排気管から煙が上がる。マツムラは、生まれて初めて太平洋に、そこに浮かぶ小さな島国に——（戦車を通してではあるが）足を付けた。



## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 E

マツムラ達が乗るチハ計16両はガダルカナルに次々と上陸した。

「……………いないな」

そこにいるはずの日本兵は誰一人とおらず、ただ夜明け前の清々しく落ち着いた空気が流れているだけであった。

マツムラは不安に思いチハから顔を出し周りを見渡す。 見ると他の車長たちも落ち着かない様子で木々の生い茂るほうを見ていた。

\*\*\*各車、予定通り展開せよ\*\*\*

1号車からタナカの手信号が見えた。指示に従い、各4両ずつ4分隊に分かれて輸送艦から離れる。

先ほどの駆逐艦、輸送艦にいた人員で分かれているため、タナカが乗る1号車、2号車、3号車、マツムラが乗る4号車の編成である。

マツムラ達チハ16両が上陸したのはエスペランス岬。ビーチ、そして島の北西に位置する。

この付近は日米多くの艦艇、航空機が沈み、アイアンボトムサウンド——鉄底海峡と

もよばれている。そういった名称からは想像できないほど綺麗な景色で、思わず見とれてしまう。ヨーロッパでは見られない光景だから。

16両4分隊は、2つのグループに分かれることになった。ビーチを見張るB中隊、車両用の道路を見張るA中隊。マツムラ、タナカはA中隊として行動する。

『おい、マツムラ。この状況、どう思う?』

タナカが直接話しかけてきた。

日本兵が見当たらないことにタナカも疑問を持っていたようだ。

「そうだなあ……うまく隠れているんじゃないだろうか」

そうであつてほしいものだ。もし隠れてもいなく、本当にこの場所にいないのであれば、それはすなわち全滅しているということだろう。生きているならば戦闘に巻き込まれているのかもしれないが、銃声一発聞こえないのであるから、兎に角ここにはいないだろう。

<<<作戦本部から戦車隊へ>>>

封鎖しているはずの無線が、いきなり開いた。

<<<なんだ、無線は封鎖の予定だぞ>>>

<<<すまない。今連絡がこちらに入ったのでそれを君たちに伝える。>>>

「なんだ、日本兵からか? 自分たちが撤退するならば無線なんぞ送っては敵に時間が

ばれてしまうだろうに。」

無線手が呆れたように話す。 確かにそうだろう。何か余程の事がなければ：

<<隊ノ足ガ非常ニ遅ク、到着マデ時間ガカカル。シバラクヲ待チイタダケマスカ だ  
そうだ。>>

無線機から、そしてマツムラの乗る車内からも複数の笑い声が聞こえてきた。中にはタナカの声もあった。

<<<いわれずとも待つき。 撤退がこの作戦の目標だからな。のこのことは帰らん>

>><<それを聞いて安心した。 こちらも海岸を見張っている。 戦車隊も頼んだぞ>

>> それほどまでに焦っているのか、もしくはジョークを言うだけ余裕があるんだろう。おそらく予定通り、少しは遅れても早急に作戦は終了するだろうとマツムラは見越した。

夜明けが近いガダルカナル。島と海の水平線は、明るく照らされていた。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 F

日の出の光がガダルカナル島を包む。

潮の香りも強さを増し、清々しい空気も一転、日の出が終わるころにはムシムシとしたジャングル特有の空気になる。

マツムラはその光景に見とれていて、戦車兵たちが何をやっているのか気づかなかつた。どうやら、タナカ率いるA中隊とビーチ側のB中隊に有線の通信を引いていたようだった。

「車長、欧米の日の出は太平洋とは違うんで？」

「自分の居た場所は海から太陽は登ってこないからな… ちゃんとした日の出を初めてみたのさ」

無線手とのそんなやり取りを挟み、そろそろ姿を現してもよいはずの日本兵達を待ち続ける。太陽は既に高く上り、まもなく昼になるころであった。

<<<こちらB中隊、異常なし>>>

『了解、Aも異常なし ったく…』

タナカもこの状況に苛立ちを見せてきた。そもそも3時間の予定の作戦であるか

ら、食料や水は最低限の物しか積んでいない。それも朝のうちにほとんど食べてしまった。

こんなに遅いとは、彼らは来る気があるのだろうか？ 夜明け前に聞いた無線も酷いジョークだと思っていたが、ここまでとは。

流石に撤退の命令が出るのが先なんじゃないかと思っていたころ、後部機銃を担当していた無線手が話しかけてきた。

「車長、アレ」

ふと戦車の後方を見ると、山を降りてくる集団が見えた。しかし、日章旗などは掲げていなかった。

<<各車、注意せよ>>

タナカの声に従い全戦車の搭乗員に緊張が走る。

集団が近づいてくると、その必要はなかったと気づいた。

日本軍の服装をした彼らは、まるで兵士なのかわからない飢えた獣、いや、もはや生き物ではないミイラのような姿であった。

『……こちらA中隊。回収部隊の到着を確認。まもなく輸送船に着くだろう。』

タナカも驚きを隠せないように、またタナカだけでなくその場にいた戦車兵全員が共に驚いていた。

彼らは銃を杖の代わりにしてあるき、ある者は足が無く、またある者は顔にグルグルと包帯を巻いた姿で現れた。全員やせ細っていて、今にも倒れそうである。

合わせて200人程であるが、まともに歩けているのは50人もいない。

「彼らに一体何が…」

マツムラがそう呟くと、有線のスピーカでなく、無線機から突如交信が入ってきた。

<<<こちらB中隊9号車！敵戦車発見！ 視認できる数は12！ シャーマンです！

>>>

アメリカ軍である。

<<<こちら1号車！回収部隊がいることを悟られるな！バレたら機銃掃射でなぎ倒されるぞ！B中隊前進用意！A中隊は島の中央、丘に向かうぞ！>>>

<<<敵、こちらに砲を向けました！ —— 各車回避行動！…機銃撃て！>>>

<<<早まるな！ B中隊、その場で交戦せよ！A中隊全速前進！>>>

多数の銃撃、砲撃音が島に響く。

それでも日本兵達の足は早まらない。アレで精いっぱいなのだ。

タナカの指示に従い、マツムラは2号車を前進させるよう命じる。

——エンジン音が車内に響いたと思つたら、風を切る音が聞こえた。本能的に身をす

くませる。

とてつもない音と共に、並走していた車両が爆発した。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 G

<<<こちら1号車、各車、防戦第一であることを忘れるな！時間を稼げればいい！>>>

<<<右前方、敵4両崖の上！>>> <<<3号車がやられた！>>>

「敵、こちらで視認できません！マツムラさん！」

「わかった！ タナカ、このまま止まっても的になるだけだ 前方の丘まで一気に進

みたい」

<<<了解した 1、2、4号車で前進する 5—8号車は道路を進んで崖の横に周りこ

め>>>

突如として戦闘が始まり、次から次へと無線が流れていく。それは空戦では体験しなかった騒がしきで、横にいる3号車の残骸を見て僚機が居ても敵を確認できずに死んでいくことを考えると背筋が凍った。

また、崖の陰に敵4両が隠れてから、静かなのがまた不安をあおる。

<<<敵12両川を横断！ビーチに入ってきた！>>> <<<こっちは8両だけだぞ！やられちまう！>>>



<<< B中隊、落ち着け！9号車と10号車は川を横断、中央の丘に陣取れ 残りはその場で敵を引き付けるんだ>>>

<<< 1号車へ、こちら7号車！敵4両確認！撃ちます！>>>

パン、パンと発砲が4連続で鳴り響くのが聞こえた。

<<< 敵2両を撃破確認：装填！急げ！>>> <<< こっち向いたぞ！動け！>>>

「2号車は丘の上に着いた！ビーチを横断する敵を視認！」

<<< まだ撃つな！完璧に挟める時まで待て>>>

先ほどとは違う砲撃音が二発聞こえた。

<<< 6, 8号車被弾、応答無し！>>> <<< こっちの番だ！撃て！>>>

<<< バン——>>>

<<< 馬鹿、無線を押したままにするな…>>>

<<< ば、化けm——

<<< こちら7号車、5号車被弾！敵2両依然としてこちらを視認——ガガガガガガガガ…

>>>

<<<5—8号車、戦線を離脱！敵2両南の崖にいるぞ！全車気を付けろ！>>>

<<<こちら9号車。10号車と共に丘に到着。砲撃用意よし！>>>

<<<2号車へ。1号車は崖を見ておく。ビーチの指示は任せた>>>

——えっ？

<<<2号車、指示を！>>>

指示を任されるなどと考えていなかったので、気が動転しているのを隠せない。

「えっえー……11号車、敵をそのまま引き付けろ 9, 10号車はビーチ中央の丘にいる敵から撃破するぞ！」

<<<了解、撃ちます！>>>

ドン！ドン！ 力強い砲撃音が、地面を通って伝わってくる。

「車長！俺も撃つていいですか！」

砲手に言われて自車に指示を出していないことに気づく。

今一度目標を確認すると、ビーチ中央で敵戦車が2両煙を上げていた。

「いや、まだだ。『b中隊で敵を引き付けていたものは一度敵から隠れる！ 9, 1

0号車、機銃を撃つてくれ』操縦手、前進、敵に気づかせろ!」

「車長、こつちも機銃撃ちますよ!」

「ああ、頼む!」

パパパパ と乾いた音が鳴り響く。

機銃に気づいたビーチの中にいた敵車両の半数以上はこちらに車体の向きを変えようとしている。

「9, 10号車 2号車に砲撃あわせ! てーっ!!」

3両の戦車が同時に砲撃をすると、こちらに車体を向けようとしていた敵の内2両を撃破することができた。

<<<クソつ、砲塔が硬い!シャーマンってのは強いつて聞いたが:>>>

<<<2号車! 敵が全部こつちに来ましたが!:>>>

自車の指示で敵を撃破できただけで安堵していたマツムラがはつと我に返る。

「11号車から16号車まで!全車ビーチを前進!車体横を狙って、敵を蹴散らせ!」

次々と鳴り響く砲撃音。無線から聞こえてくる敵撃破の報告。

遙か上空でなるプロペラ音には、マツムラ達が気づくことはなかった。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 H

マツムラの乗る2号車と9、10号車がビーチを南の丘から見渡して、ビーチ西に位置するB中隊がじりじりとビーチで立ち往生している敵に近づき、敵を撃破していく。

敵の戦車隊は劣勢だと判断したのか、後退しようとしている。

＜＜敵をまた撃破！残りの敵は隠れました！＞＞

先ほどまでビーチを埋め尽くしていた米戦車隊も、今や残骸となっている。撃破した車両とみると、ビーチに隠れている米戦車はあと2、3両だろう。

川の南にいるであろう米戦車が気になるが。

「なんとか任務は達成できそうだな…」

マツムラは安堵し、腰を下ろす。砲声も止み、島に静けさが戻る。

南を見張っているタナカに現状を伝えなければ、と無線をつなぐよう指示すると、通信用の手が動く前にタナカの声が聞こえた。

＜＜マツムラ、プロペラの音が聞こえる。十分に注意し——

<<<こちらら13号車、敵航空機を視認！海側、上方からきます！>>>

戦車から身を乗り出し、敵の航空機を確認する。その航空機は、マツムラが傭兵軍訓練の際に搭乗した航空機、F6Fであった。

<<<敵の航空機、さらに確認！全部で3機！>>>

「先頭の一機から撃ち落とせ！」

マツムラは叫ぶ。登り切った太陽を背に迫りくるF6Fには爆弾のようなものが見えたからだ。それもとてつもなく巨大な。

「車長……この位置じゃ機銃で狙えません！」

命令した後に気づいた。この戦車、チハ改には車軸の機銃があるが、もちろん仰角は高くなく、対空には使うことができない。

「全車、移動！敵の射線から外れるんだ！」

先頭のF6Fが機銃を撃ち、上を通り過ぎる。

<<<こちらら15号車、エンジンに被弾！>>> <<<13号車、行動不能！>>>

「消火器を使い！無理なら車両を放棄しろ！」

<<<放棄!?!そんなことはできません！>>> <<<まだ治ります！走れます！そうやすやすと——

F6Fが落とした爆弾のような物が、13号車と15号車を仕留める。

<<<こちらら14号車！先ほどの爆発で履帯が損傷しました！12号の無線が不調、同じく履帯損傷とのこと！>>>

行動不能であれば、また先ほどと同じように撃破される。

マツムラは車両放棄の指示をだした。

<<<了解！離脱します！>>>

<<<11号車、敵戦車視認！>>>

空へ向けていた視線を元の位置へとようやく戻す。

みると敵のシャーマンは、砲塔上についている機銃を構えていた。

「しまっ……」

横殴りの雨のように機銃が撃ち込まれる。

その向かう先はB中隊であった。

<<<くそつたれ！>>>

顔を出していた2両のシャーマンは火を吹き上げる。

<<…こちら16号車。先ほどの脱出した乗組員は…>>

マツムラのミスであった。

確かに、履帯が損傷していれば航空攻撃からは危険にさらされるが、敵の目の前で身をさらけ出させることはもつとマズい事だった。

「車長さん、気を負う必要はないよ…敵が彼らを殺したんだ」

通信手にそういわれたが、マツムラは自身の選択を悔やんだ。

しかし、まだ戦闘は終わっていない。

タナカに乗る1号車に、マツムラに乗る2号車。2号車の傍らにいる9、10号車に合わせ、11号車、16号車の計6両がまだ生き延びていた。

敵の戦車も、確認できた16車の内、南で見失っている2両。それと航空機がまだ残っている。

敵の航空機が存在が大きい。マツムラは生まれ育ったヨーロッパには程遠いこの辺境の地で最期を覚悟した。

## マツムラ戦闘日誌 二冊目 太平洋の雷雲 最終話

飛行機のエンジン音も、戦車の砲撃音も聞こえなくなり、島に静寂が戻る。

マツムラは先ほどまで戦闘を共にしていた戦車の損傷確認を終え、1号車に呼びかける。

が、1号車がその無線には応じることはなかった。

不審に思い、マツムラは戦車から身を乗り出し付近を見渡す。

戦闘が開始する前に1号車が居たはずの丘を探すが、やはり戦車を見つけることはできなかった。

しばらくすると、空にエンジン音が響く。マツムラは全車の移動を命じた。

「敵二両の行方がわからないが、我々の任務は撤退する隊の防衛だ。敵を探しに行く必要はなし、後退、各車回避するように」

エンジン音が小さくなったと思うと笛のような音が聞こえる。マツムラはそれとつさに爆弾だと判断し、空を見上げ、操縦手に指示をだす。

回避できた、と思うと爆弾の向かう先には10号車が居た。

<<10号車、避けられません……武運を>>



爆弾が爆発すると無線にノイズが走った。

「くっ… 9号車、転回して上陸地点に向かうぞ」

<<<了解。>>>

気持ちを入れ替えたのも束の間、司令部から無線が入る。

<<<こちら司令部、輸送艦に敵飛行機が接近！ 一度海岸から離れる！>>>

無線には、エンジン駆動の鐘の音がはつきりと入っていた。

ここで異を唱えたところでもう遅い。どちらにせよ、輸送艦には無事でいてもらわなければこまる…

「車長、僕らの覚悟はできてます」

悟ったように砲手が口を開く。

<<<車長、このままここにおいても仕方ないです 山へ一気に登ってしまったほうがよいと思います>>>

もう我々には、ここに残って生き延びる、もとい戦うしか道はない。

「わかった、全員で山を登ろう。 16号車は上陸地点へ向かって、残存している兵隊が

居たら… 無線をくれ」

<<16号車、了解>>

三両で列をなし山を登る。飛行機のエンジン音が聞こえるたび、一度戦車を木々に隠れさせる。

少しずつではあるが着実に前進していた。

あと少しで山（というより丘だが）を一つ乗り越える所であった。

が、事はそううまくは行かない。

丘の頂上に着くと、その先には木々が生えていなく、航空機から丸見えになっている場所であった。いわゆる禿山である。戦車で動けば確実に見つかるかわかつて

いたが、マツムラは戦車から降りるように命令することを躊躇した。生身で飛び出せ

ば、それこそ機銃掃射の餌食になるからだ。

「……これより先は、各隊の判断に任せよう 投降するものはここで戦車から降りて、

木々に身を潜め待機するんだ」

<<……………>>

返事をするものはいなかった。

「…車長さん、あんた傭兵だからって自分だけ助かる気か？」

通信手がそういった。

「いや、そんなつもりじゃ——」 「もしそういう気持ちがあるんならそうしてくれ。俺

「たちは戦う」

「…………いや、そんな——」——バコガオオオン——

「被弾被弾！」 「9号車がやられたぞ！」

マツムラは戦車から脱出する。 続いて、通信手、操縦手が抜け出して来る。

砲手は出てこなかった。

こうして残った戦車は11号車と、海岸に向かったきり連絡がつかない16号車である。

流石にこの戦力では戦うことはできないだろうし、降伏を選ぶしかない。が、日本兵たちは各々拳銃を取り出し始める。

「何故だ!? なんのために戦うって言うんだ？」

11号車とともに、開けた道を進む日本兵たちは、特に何も答えずにどんどんと山奥へと進んでしまった。

マツムラは、背後から戦車のエンジン音が聞こえてくるのがわかった。 後ろを振り返ると、姿が確認できなかった1号車、タナカの姿があった。

「マツムラ、お前は日本兵じゃない 傭兵だ」

——だからここに残っていい、投降しろ。

と、マツムラは言ってほしかった。が、そのままタナカは戦車を走らせる。

白布をマツムラに投げ渡し、11号車の後を追って戦車を追って行った。

マツムラは、自分だけ一人残された者の気持ちを味わうことになった。

自らもつい先刻まで、あちら側で、共に戦ってきたのに。

第一、奴は、1号車は何をやっていたのだ。見張っていたのではなかったのか。誰にもぶつけようのない怒りを籠め、白布を放り投げた。

マツムラは怒りで染め上がった白布を拾い上げ、海岸へと向かった。個人的に、16号車が気になっていたからだ。

だが、軽い気持ちで海岸へ向かったことを後悔した。

最期の力を振り絞ったであろう陸軍兵のほとんどが、自らの拳銃や刀で自決していた。

力のない目で、生きているのかわからない体で、座っている者もいる。

16号車は、その中央にいた。

「あんたは…2号車の傭兵さんか…」 「…傭兵さんも投降するのか？」

マツムラは無言でうなずく。

「そうか…なあ、欧米の人間って比べると、俺達っておかしいよな？」

「そんなことは…ない」 投降せずに山奥へ進んでいった日本兵たちの姿が通り、言葉が詰まった。

「——愛国心が、強いだけだ」

ついぼろつと、自然に言葉が漏れた。 だが、おそらくそうなのだろう。

そうでなければ、戦う理由などない。 撤退作戦が失敗した今、この島から日本へ帰る手段は投降しかない。 彼らが例え捕虜となつて、ひどい扱いを受けようが生き延びるにはそれしかないはずなのだから。

16号車の搭乗員が刀を持っていたので、それを借りて、先ほどの白布と合わせ投降の用意をすすめることとした。

海岸であれば開けた場所なので、投降の意思が伝われば誤射の可能性もないだろうとして、戦車の周辺に生存者を集め、上空を飛んでいた飛行機に白旗を見せる。

敵飛行機は2、3回周囲を回ったかと思うと、低空で飛行し元来た方向へと帰って行った。

しばらくすると、米軍のトラックと戦車がやってきて、マツムラ達を拘束した。

マツムラは傭兵で有ることを伝え、傭兵軍の名前、所属部隊等… 覚えている情報す

べてを米兵に伝える。

日本兵たちとは別のトラックに載せられ、その場を後にした。

私は、傭兵としてはまだまだ未熟であり、2回しか実戦には出撃したことがない。

だが、戦争のもたらす大きな意味は、十分に理解できた。もちろん、私以上の体験をした人の方が多いだろうが、私個人、もうたくさんだというほど深く傷を残していったのだ。

私の体験談は、誰かに読まれることはないだろうが、ここに、祖父の書籍に、伝記として残しておきたいと思う。

今日からは、傭兵としてではなく、平和になったこの世界で、搭乗員『パイロット』として活躍するのだ。

どういふことか？ War Thunderのパイロットとして、活躍するっていう意味さ。